

第二百九十一 娘の理想

小山の妻君も同感なりけむ「ホントに大原さんの力を以て我邦の家庭教育を改良したら嘸世中が清くなつて楽しい事で御座いませう、然しそれも大原さん一人の力では隅から隅まで行届く譯に参りません、是非とも貴娘が内から助けて婦人社會を感化なさらなければ大原さんの功を全くする事が出来ませぬ、私は一日も速く大原さんと貴嬢が奥床しい御夫婦にお成りなすつてお二人揃つて世中を感化なさる處を拝見し度いと思ひますよ、オホ、何ですつて、爾んな事は望まれないつて、今度こそ大丈夫です、大原さんが洋行なすつてお了ひなさればモ一決して御心配はありません、お代さんの方は私共夫婦が引受けて屹度始末を付けますから誰が何と云つても今度はモ一貴嬢と大原さんの間を妨げるものはありません、大原さんの御歸朝が待遠しかつたら貴嬢も跡から西洋へいらつしやいまし、貴嬢が西洋へいらつしやり度ければそれこそ何んな機會もありませう、矢つ張り家庭教育の取調をなすつても宜し、料理法の研究をなすつても宜し、何の口も直ぐ出来ますよ、ホントに寧その事爾うなさいましな」と段々話しが先走りする、お登和嬢餘りに此の話を進めらるゝが厭はしく「私はモ一／＼決して先の事は何とも考へません、私なんぞが淺果な智恵を以て未來の事を考へても決して解るもので無いそつですから却つて考へない方が樂で御座いますよ、子一奥さん、人は誰でも先の事を考へ度がりますけれど滅多に物事が考へ通りになつた例がありません、それは考へるのが

悪いので無い、まだ考へるだけの智識と経験を蓄へないで只無闇に考へるからだとよく兄が申しますよ、譬へば海岸へ出て海の水の穏で廣々した處を見ると誰でも好い心持になつて海の眞中へ出て見度い様な氣がします、小舟に乗つて海の中へ出ると海岸で眺めた時よりは案外に波のウ子リが大きくつて舟は揺れる、心持が悪くなる、オヤ／＼斯んな積りでは無かつたと忽ち怖くなつて來る處へ風が起り雨が降つて海が荒れ出して來ると舟が今にも顛覆りはしないかと思つて生きた心持のしない様な事もあります、現に私も國に居る時分折々海へ出て爾んな目に逢つた事も御座います、爾うなると海が恐くなつて厭になつて最初に考へた事とは丸で違つて終ひます、兄がよくその譬を人の事に取つて斯う申します、それは全く最初の考へ様が悪いので海は一年中平で穩なもので無い、時あつて風も起り波も荒くなるのが海の持前だ、それを無經驗の内は何時でも平に穩なものと思つて居るから風に遭ひ波に遭ふと非常に驚く、最初から海の事をよく知つて居て今日は穩だがもし途中で風が出たら斯うして避けると用意して乗出せば少し位の風波があつても決して驚かない、今の青年男女がまだ社會へ出ない内に學校の窓から社會を望むのは丁度無經驗の人が初めて岸邊から海を望む様なものだ、社會は何時でも春の海の様には穩なものと思つて何の用意も無く乗出して見ると忽ち風も出れば浪も起る、そこで大に狼狽して社會を怨み世を罵り、所謂厭世主義の悲哀觀を起す様になる、まことに不心得千萬な事だ、殊に今の女學生や浮氣娘の間には自分勝手な理想と云ふ言葉が流行してヤレ我が理想に適つた良人を持ち度いか我が理想に適つた家庭へ嫁入し度いとか言ふがまだ社會を知らない娘時代に何うして理想なぞが立てられるものか、丁度海岸に立つて理想的の無風無波な海へ

乗出し度いと云ふに同じ事で、爾んな海は世界に無い、無いと忽ち世を罵る、是れも不心得の第一だ、何でも娘の時分は我儘な心と生意氣な心を慎んで老巧者の教へに順ふものと心掛けなければならん、老巧者の唱へる理想を實行するものと覺悟しなければならん、娘時代に我が理想なぞと云ふ生意氣な心を出すのは他日身を不幸の地に陥れる基だとよく兄が申しますから私は決して未來の事を自分では考へません」と是れがお登和嬢の平生の覺悟、

第二百九十二 世の風波

斯る物語は多少經驗のある婦人にこそよく解し得らるゝなり、小山の妻君さも我意を得たる如く頷きて「ホントに爾う被仰れば世中の事は今のお話の通りですよ、私なんぞも矢つ張り學校の窓から社會を眺めて自分勝手な理想を立てた方ですが今になつて考へて見るとホントに可笑しい様で御座います、私計りでありません、其時分の學校友達は皆んな同じ様な事を考へたものです、丁度お話の様に理想の海と云つたら風も無く波も無く一年中盪の水の様に穩でそこへ乗出して幸福の岸へ着いたら嘸樂しいだらうと云ふ様に考へたものです、ところで世中へ出て見ると丸で娘の時分に思つた事と反對で海でも無風無波と云ふ日は滅多にありません、稀にあれば暴風雨の起る前兆位なものです、其代り風を凌ぎ波を凌いで其海を渡つて行くのが航海者の楽しみである通りに私どもが風波の荒い世中を凌いで行くのも亦た一つの楽しみです、然しそれは娘時代に決して想像の出来ない事で、娘時代に想像したものよりはモット樂みの深い幸福の多いものですけれども、

最初に無風無波の理想を持つて居たものが社會の海へ乗出して初めて風波に遭ふ時は誰でも一度驚きます、其時の心掛次第で女の幸不幸が岐れるのでせうが娘の時代に何の覺悟も無かつた人は多く自ら不幸の地に陥ります、私自身の事を考へて見ても色々な事が御座いますよ、私の實家は少し地位もあり資産もあつた方ですから私は浮世の風波を知らずに育つて學校へ入つてからも其時分の教育法で無闇に突飛な高尚な事計り習つたものです、高尚と云ふのは悪い事でありますまいけれども中川さんの風流亡國論の通りに何でも風流がかつた事を高尚と心得て其實は迂遠な學科計り稽古したものです、それが縁あつて小山文學士の處へ參る様になりましたからそれこそ娘心の理想では良人と共に毎日風流を樂んで或は歌を詠み詩を作り或は共に天下の名所舊跡を歴遊して飽くまで風雅な生活をしやうと思つて居りました、ところが恥をお話し申さなければお解りになりません、私が嫁に參つて第一に驚きましたのは書生上りの貧乏世帯です、家は狭いし道具は寡いし、何事も足らぬ勝で私は何となく鼻が悶へる様な氣が致しました、實家に居て廣い邸に住んで奉公人を澤山使つた身が急に島流しにでも逢つた様な氣がして心細く感じました、爾うすると嫁に參ゐつて三日目にたつた一人の下女が急に病氣になつて宿へ下がりました、良人は社へ出て不在ですし、晩になつても御飯の副食物を拵らへる事が出来ません、近頃の様には學校時代から料理の事を仕込まれて居れば狼狽もしませんけれども副食物拵へは奉公人の役目位に思つて居た私ですからサア何うする事も出来ません、それでも良人が歸へつて來て食べる物も無かつたら困るだらうと思つて九死一生の大奮發をしてお吸物の様な物を拵へて見ましたが實に入れるものがありません、八百屋へ買物に行くと云ふ勇氣は出ず、

獨りで困つて居る處へ門の前を豆腐屋が通ります、あれでも買はうと策を持って裏口まで出たのは宜う御座いますけれど、も聲を出して豆腐屋を呼ぶ事が出来ません、豆腐屋ーと呼捨てにして宜いものか、豆腐屋さーんと尊敬して呼ぶべきものが、何と云つて宜いのか譯が分らんで考へて居る内に豆腐屋はズン／＼通り過ぎて了ふではありませんか、ホントにあんな困つた事はありません、娘時代の理想に豆腐屋を呼留める言葉まで考へて置く人は滅多にありますまいから子」お登和嬢も思はず「オホ、」と笑ひ出しぬ、

第二百九十三 身の上話

小山の妻君も共に笑ひ「オホ、爾う云ふ譯で豆腐屋を呼び損くなつて其晩は里芋の堅いのを吸物の實に入れて大層良人に笑はれましたがそれから毎日一生懸命に副食物拵への稽古です、それも私計りではありません、外の學校友達を聞いて見ますのに大概誰でもお嫁に行つて同じ様な經驗をしたそうです、商人の妻になつたものが八百屋を呼捨にして横柄だと悪く言れたり、軍人の妻になつたものが魚屋さーんと丁寧に言つて良人に戒められたり、色々な奇談が御座いますよ、畢竟良人の資格によつて妻たるの覺悟を定めなければならんと云ふ思慮が無いので、何でも娘時代の理想通りに押通さうとするから間違ふので御座いませう、お姑さんとの衝突も矢張りそれから起るのが多い様です、娘の理想に適つた良人さへ寡い世中ですもの、娘の理想に適ふ様なお姑さんが滅多にある氣支ひもありません、私は舅姑が郷里に居りましたから此方では夫婦差向ひで御座いました廿十日計り過ぎると或

時良人が家の近所で車から落ちて右の腕を怪我しました、それを宅へ持ち込まれた時には私も只狼狽する計り、疵口へ何う云ふ手當をして可いものだか何うして可いか譯が分りません、醫者を呼びに遣つても急には來て呉れず、ホント二困まりましたよ、西洋の女學校では必ず看病學や繃帶の仕方を教へると聞いて居ますが私どもの理想に良人の怪我を手當するなんぞと云ふ事は夢にもありません、小式部が言下に歌を詠んだとか曹建が七歩の詩を作つたと云ふ事は習ひ覺えて居ますけれども怪我をした時即座の應急療法を施すと云ふ様な實用の學科は一つも習つた事がありません、幸に良人の怪我が極く軽いので一週間計りの後に全快しましたけれども其時の私の驚きはまだ忘れません、あれが海へ乗出して急に大風に遭つた様なものです子、オホ、然し爾う申すと嫁に參つてから悪い事計りあつて懲々した様に聞えますが一方には段々良人の情愛が解つて参りますし、良人の價値も知れて來まして是れも矢つ張り娘時代には迎も想像の出來ない幸福を感じました、ですから善い方角も悪い方角も皆んな娘時代の理想以外です、爾うして居る内に丁度二月計り過ぎますと私の身に取つて一大打撃が参りました、忘れもしませんあの時の事は、良人の不在に妙な人が尋ねて來て奥さんにも宜いからお目にか、り度いと申しますので逢つて見ますと、今迄人の噂に鬼の如く聞いて居た高利貸です、是非今月の末迄に三百圓の金子を返濟しろ、返濟が出來なければ訴へると嚴重の談判です、私は良人が歸つたらお返事しやうと幾分か腹も立ちましたからケンモホ口、に追返しましたけれども其時の心持と申すものは今に忘れませんよ、小山は物堅い人物と聞いて嫁に來たけれども矢つ張り以前は放蕩でもして高利貸の金を借りて居たのか、爾う思へば机の抽斗に藝者の寫眞が一枚大

切そうに藏つてあつたがあれがお馴染と云ふものか知らんなぞと餘計な嫉妬心まで起して其時ほど心の悲しく淺ましく思つた事はありません、家庭の幸福も何も彼も忽ち消えて了つた様な氣がして良人の歸る迄は心の中で泣いて居りました」と始めて聞きし身の上話しにお登和嬢も耳新しく覺え「オヤ、爾んな事がお有りになりましたか」

第二百九十四 大打撃

人生の風波は思ひ設けぬ方面より起る、小山の妻君熱心に「マア何卒終ひまでよく聞いて下さい、それが全く私の邪推で、娘時代の理想に良人が高利貸に責められると云ふ様な事も想像しませんから只驚きの餘り色々な邪推を起したのです、極端迄邪推を逞ましくしたのです、爾う云ふ時に好い方角へ考へる事は決してありません、悪い方へ計り考へて獨りで悲しくなりました、晩になつて良人が歸りましたからその話しをしますと良人も少々困つた風で、あれが愈よ遣つて來たか、あれは友達の借金へ判を押したが連帶責任になつて居るから此方へ來たのだ、本人は遠方へ往つて居て逆も返金の見込は無し、自分が何處までも責任を負はねばならんと頻に思案をして居ります、私は其時濟まない事ですがまだ良人を疑ひました、友達の借金なら貴郎が被る譯もありますまい、貴郎も少しは手傳つてお遣ひなすつたのでせうと串談の様に氣を引いて見ましたけれども決して爾うで無いと云ひます、それならば机の抽斗にある藝者の寫眞は何うしたのですと痛く無い腹まで探りますと、その友達があの藝者に溺れて墮落したから非常に苦諫して手を切らせて遠方へ友達を遣つたのだ、そ

の時友達の手から取上げた寫眞だと斯う申します、それでもまだ私は十分に信用しません、平生嘘を吐かない良人だけれども此事計りは怪しい位に疑つて居りました、人の妻となつて良人を疑ぐる位物悲しく情け無い事はありません、良人の言葉を信用する事が出来ない位なら天下に何を信用する事が出来るだらう、實に淺ましいものだとの時位不愉快に思つた事はありません、爾うしますと良人が翌日高利貸の家へ出向いて色々談判した末三百圓を月賦で返す事に極めて参りました、それからと申すものは毎月の収入を殆んど半分近く高利貸の方へ取られる始末、左なきだに私の目から見ると物足り無い貧乏世帯が愈よ物足りなくなつて私は始めて辛いと云ふ感じが起りました、過ぎ去つた事は咎めないにしてもそれが為めに私迄が長い間苦しい思ひをしなければならんかと口惜しくなりまして、三百圓位の金子なら私の實家へ話して出してお貰ひなさい、私が口を添へれば必ず出しますからと良人に勧めましたけれども承知しません、自分は女房の實家へ金を借りに行く程の意氣地無しでも無い、自分の責任は自分で果すと云つて一生懸命に外の反譯物まで引受けて遊ぶ處も遊ばないで一年計りは借金返しに苦んで居ました、其内に此方の中川さんや外のお友達がいらしつてのお話しに漸く事の眞相が私にも解りまして良人の言葉は嘘で無い、全く墮落した一人のお友達を助ける為めに其人の借金まで背負つて獨りで苦むのだと疑の心は悉皆晴れましたが、サア爾うなると良人や子どもの苦しむのが馬鹿々々しくつて溜まりません、自分に何の罪も無くつて他人の為めに斯んな苦しい想ひをして借金を返して遣るなんて何と云ふ損な事だらう、旨く掛合つたら返さないでも濟みそうなものだ、良人があんまり正直過ぎると私の淺果な心から窃に不平を起した位です、それで

もマア辛抱して一年足らずの内に漸くその借金を返して了ふとそれから三月ほど過ぎてその本人のお友達が突然臺灣から歸つて来て、實に君の恩は忘れない、僕も臺灣で少し金を拵へたから君の損害は此の通り辨償する、金錢の損害は辨償しても君の迷惑は辨償し盡せない、その恩は末長く報ずると云つてそれから後臺灣へ歸りましたけれども良人を兄とも親とも思つて何事も親切にして呉れます、一方には高利貸連中が小山さんなら何時でも安利で金をお貸し申すと大層な信用で、夫が四方八方へ廣まつて小山の物堅い評判は段々高りました」

第二百九十五 小言の愉快

小山の妻君「子ーお登和さん、其時私は生涯忘れられない程愉快を感じた事があります、それは私が實家の父に叱られましたので、その叱られたのが何よりの愉快です、以前小一年計り借金返しに苦しんで居る時分には私も折々實家へ參つて母に愚痴を申した事もあります、それを父がよく知つて居りまして或時私に申しますには和女ほど不心得なものはない、小山さんが他人の借金を背負つて苦しんで居る時にナゼ折々家へ來て愚痴を漏した、愚痴を漏すべき事が無い、本來なら小山さんの難有い事を感じて其身の幸福を悟らなければならぬ、もしも小山さんが自分の責任を通れる様な工風をするとか或は和女を頼で家へ金を借りに來る様な意氣地のない人であつたら、それこそ和女が不平を起しても仕方が無いが小山さんの仕方は實に男らしい、自分の責任は自分で果すと云ふ立派な覺悟のある人物だ、友達に對してすら其通りであるから妻に對しては尚其上の覺悟を持って居るだらう、即ち人の

良人となつては飽くまでも良人たるべき責任を盡す人だ、して見ると和女の身に取つて是程難有い幸福な事はないでないか、世中に何が役に立たんと云つて何事にも自分の責任を遁れ度がる人位附甲斐無いものは無い、外へ對して責任を遁れ度がる人は我が家庭に對しても主人たり良人たるべき責任を盡さない人だ、世間には男子の癖に爾う云ふ意氣地無しが多いけれども小山さんは實に珍らしい、その小山さんの眞價を悟らないで却て不平を云ふとは重々和女の不埒だ以來何事があつても小山さんの言ふ事に負いてはなりませんと私は散々叱られました但其時の嬉しう御座いましたこと、モットノ、叱られても宜いと思ひました、それから後は宅の父も小山の事を知つた人へ吹聴して我が婿は斯う云ふ人物で御座ると自慢を申すのです、あの廣海子爵なんぞは最初實家の父が小山を紹介しましたので、お登和嬢「アラ爾うで御座いますか、それでは矢つ張り其事が私どもへまで關係して居るのです子」妻君「ハイ、世中は妙なもので御座いますよ、それから私も始めて我身の幸福な事を感じましたが一つ好くなれば外の事も段々好くなるもので其事の信用から小山の地位も次第に進みますし色々な幸福が諸方から舞込で参ります、もしも以前借金で責られた時私の思つた通りに責任を遁れる工風したり實家の親に金を借りたりする様な小山でしたらば私も決して斯んな幸福は得られないのです、つまり私をして一時苦しい目に逢はせて呉れた様な良人ですから私の幸福になつたのですが娘時代の理想に爾んな事は決して考へられません、勿論世間の娘には私よりも見識のある人があつて爾う云ふ場合に、よくこそ他人の借金を引受けて呉れる、よくこそ物足りない貧乏世帯から半分の収入を借金の方へ廻して呉れる、實に有難い人だと感じる事があるかも知れませんが先づマア寡い方

でせう、所謂る娘心の淺果な理想から申しましたら私と同様に或は良人を疑がつたり或は馬鹿らしいと思つたりする様な事が無いとも限りますまい、私ですら其通りですから娘時代の理想なんぞがあんまり當になるものでありません、世間の娘を持った親や或は女子を教育するものはよく爾う云ふ事に注意して女の子に生意氣な心を出させない様にしなければなりません」と是こそ最も有力なる經驗説